モンペとサルッパカマをリデザインした農作業着の服飾デザイン －「農業スタイルコレクション 2013 in 長門油谷 with 会津若松」を事例として－

Clothing Design of Agricultural Work-Wear inspired from Mompe and Saruppakama: A case study of the Fashion Show 'Agriculture Style Collection 2013 in Nagato-Yuya with Aizu-Wakamatsu'

水谷由美子 * 安倍昭恵 ** 武永佳奈 *** 水津初美 ***
Yumiko MIZUTANI　Akie ABE　Yoshina TAKENAGA　Hatsumi SUIZU

キーワード：服飾デザイン　モンペ　もんぺ　モンペッコ　ハオリーナ　袴パンツ　サルッパカマ　柳井縞　玖珂縮　会津木綿　金子みすゞ　農業振興　安倍昭恵　長門市油谷　会津若松市

Keyword : Clothing Design Agricultural work-wear Mompe Mompekko Haorina Hakama-Pantsu Saruppakama Yanai-jima Kuga-tijimi Aizu-momen Misuzu Kaneko Agriculture Development Akie ABE Yuya in Nagato-city Aizuwakamatsu-city

はじめに（文責：水谷＆安倍）
１．共同企画とプロセス（文責：水谷＆安倍）
２．モンペの変遷と現代（文責：水谷）
３．モンペッコの創作とその背景（文責：水谷）
４．ファッションショーの企画（文責：水谷＆安倍）
５．シャレかわ Noubou の開発（文責：水津）
６．袴パンツ×サルッパカマ（文責：武永）
７．AKIE × YUMIKO プロジェクト　（文責：水谷）
まとめ（文責：水谷）

This essay focuses on fashion design for agriculture development in Japan. Specially, I talk about a case study of the Fashion Show 'Agriculture Style Collection 2013 in Nagato-Yuya with Aizu-Wakamatsu'. This project was motivated by our First Lady, Ms Akie ABE, who has been working in agriculture since 2001. I have already researched and created rural fashion incited from the daily wear of farmers.

In this paper my co-researchers and I discussed about the planning of new developed Mompe pants, called Mompekko, and Haolina whieh is a shirt like the upper half of Samue (Japanese working wear), and newly developed hats and Saruppakama pants originating from Aizu-Wakamatsu-city.

In this theme, we collaborated with traditional textiles, specializing in both striped clothes of Yamaguchi Prefecture (Yanai-jima) and Aizu-Wakamatsu-city (Aizu-momen). Additionally, I use the Kuga-tijimi, which Kuga people had asked me to develop into a proper design with them.

* 山口県立大学大学院国際文化学研究科教授
** 安倍晋三内閣総理大臣夫人
*** 山口県立大学大学院国際文化学研究科２年

はじめに

本研究は３年前に安倍昭恵夫人が下関で米作りを始められ、農作業をするときに若い女性がオシャレに着られる服がないという理由で、筆者に共同研究開発をしないかと発案されたことに始まる。

昭恵夫人とは 2005 年秋に開催された「モーリの色彩空間 － 九美神 －」に参加するに辺り、女神の１人になって頂くように依頼したことから関係がはじまった。その後、山口市で開催したファッションショーやアートプロジェクトに審査員などとして参加を得た。その過程で親交が深まり、2006 年に共同研究としてファーストレディの宮中晩餐会用イブニングドレスを研究室でデザインし、制作することが実現した。

宮中晩餐会という華やかで機能性よりも美しさが優先されるドレスとは反対に、農作業着は機能的であることがまず優先され、同時に美しさが求められる。またコンセプトには時代性が盛り込まれる必要がある。

日本では農業に関心を持つ若い女性を農ギャルや野良ガールと呼ぶようになってきた。2009 年に渋谷ギャルが作るギャル米が話題となった。若者ファッションに影響力を持っている渋谷ギャルが農業を始め、その服装にも注目が集まった。全国的にも少しずつ農業に若い女性が興味を持ち、都会から地域に移り住んで活動している姿がメディアでも紹介されている。

また、ヤンマーが佐藤卓の総合プロデュースで、農機具の開発と同時に農作業着を 2014 年に発売を開始するために、2013 年７月 25 日にアグリウエア専用の服が発表された。デザイナーは元イッセイ・ミヤケでパリ・コレクションのレディスのデザイナーであった滝沢直己である。ヤンマーのイメージを刷新するような近未来的なデザインである(注1)。

我々の目指す農業スタイルは、一次産業としての農業から工業そしてサービス業が掛け合わされた６次産業までを視野に入れたものである。また、方法として地域の人からインタビューし、求められるデザインを追求することである。

発案から２年間は具体的な計画は進まず、ミーティングに終始していたが、本年の春になってようやくアイデア出しやコンセプトを詰めるミーティングが実現された。そして、2013 年 10 月 13 日に安倍晋三内閣総理大臣の故郷である長門市油谷でファッションショーを実施することになった。

本論では、そのプロセスと開発した農作業着を紹介し、それらのコンセプトやリサーチ、デザインプロセスや制作などについて記し、検証しようとするものである。

ここでの最後に、ファッションショーのプログラムにメッセージとして掲載された共同研究者である安倍昭恵夫人の言葉を引用する。

「下関市安岡で米作りを始めて３年になります。土に触れ、季節の移り変わりとともに稲の成長を見届けることを楽しく思っておりますが、都会の若い人達にも田植えや稲刈りに声をかけると、多くの人が遠路はるばる手伝いに来てくれるので驚きます。

最近では農ガールや野ギャルといった言葉も聞かれますし、農業に関心のある若者は想像以上に多いのかもしれません。企業でも社内のコミュニケーションやリフレッシュの機会として農業を活用しており、農業を見直す機運が高まっているように感じております。

このような気運の中、若者達に農業をより身近に感じてもらうためにも、『ファッション』は欠かせない要素だと考えています。農作業に必要な動きやすさを兼ね備えたオシャレな農作業着が広まれば、日常生活にも取り入れられ、農作業が特別なものではなく、ライフスタイルの一部となるかもしれません。

本日のファッションショーを通じて、魅力的な農作業着が広まり、一人でも多くの方に農業を楽しんで頂くことが出来れば嬉しく思います。ぜひ最後までお楽しみください。　安倍昭恵　(写真１・2)」

写真１　安倍昭恵夫人
絣ジャンプスーツ農作業姿

写真２　安倍昭恵夫人　トラクターでの作業姿

以上にあるように、この共同研究プロジェクトはファッションを通して若者に農業への興味をもってもらうきっかけを作ろうとするものである。同時に、伝統的な農作業に学びながらも、現代の若者の感覚、ひいては実際に農業をしている人々にも支持されるような服を開発することが目的である。

なお、今回テーマとしたのは、地域資源である伝統染織にも光を当て、ファッションショーのストーリーとしてデザインに織り込むことも目指した。

実際、3.11と呼ばれる東日本大震災が起きて以来、日本人の間で家族や地域コミュニティとの絆が見直されてきている。さらに、農業への関心も高まっている。特に福島県の農業は大きな打撃を受けたため、今回のプロジェクトで福島の農業への何らかの振興に役立てられるコンセプトを作れないかという議論になった。

そこで、3.11以来、福島の方々を応援するために、会津若松市に何度も通っている昭恵夫人の発案で、会津若松市の農業者との交流をも目的とした。

福島の服飾文化を調べてみると会津若松市にはかつて農作業着として着られていた会津木綿の伝統があることを知った。筆者は山口における柳井縞の振興を10年ほど手がけて来ている。そこで、縞織物を通じて福島と山口の交流を作品で表現するコンセプトを決めた。

以下ではまず、どのように今回の作品を開発する企画を立てたかについて、検証する。

１．共同企画とプロセス

2013年４月に昭恵夫人とのコンセプト・ミーティングを終えた。はじめに述べたように、ここでは農作業着で若い女性にファッションに興味をもってもらおうという趣旨、長門市で実施すること、さらに会津若松市とのものや人との交流を行おうということが決まった。

そこで、６月下旬に筆者が昭恵夫人とともに理解者を得るために会津若松市を訪問することになった。会津木綿について調査すると、一般にモンペと呼ばれているもの以外に、サルッパカマというこの地域独自の農作業着のスタイルがあることがわかり、現地にて調査することとした。

会津民俗館（会津若松市猪苗代湖）に、現物が収集されているために予約をとり訪問した。そこでわかったのは、サルッパカマは会津若松市の市東に位置する苗代湖周辺では、サッパカマと呼ばれていた。

モンペとは異なり、足首から膝までは足にフィットしており、膝下から腰に向けてゆったりとしており、前と後のウェスト部に付けられた紐で、前は前、後は後同士で結ぶ形態である。山仕事や野良仕事では膝下がだぶだぶしていると邪魔であり、また危険でもある。それ故に、サルッパカマの形態が作業着として好んで用いられた。

縞織については、会津若松の地域プロデュースをしている本田勝之助の案内で、会津木綿の製造工場、山田織元を訪問した。現在は会津木綿の織元は２軒のみとなっている。インタビューで昔の縞織帳を用いて説明を受けた。会津若松市は猪苗代湖のような会津東、そして会津北、会津中央、会津南と大きくは４つの地域に分かれており、木綿の縞柄が地域で異なっていた。

皆が同じ縞織を着るというように、地域のユニフォームになっていたことは驚きである。また、よそ者が入って来たときにすぐにわかるように、地域を守るための服でもあった。

東山温泉芦名旅館の女将の証言によると、モンペは基本的におしゃれ着として着られていた。一方で、農作業や山仕事にはサルッパカマが着られていた。それ故に、農家のお嫁さんがモンペばかりはいていると言われたら、あまり農作業をしないよくないお嫁さんということだったようだ。

以前の会津木綿の色は作業着用であることもあり、藍色とやや黄土色の地味な色の組み合わせである。そればかりか、現存する昭和30年代のサルッパカマを調査すると、そのほとんどがボロとも言えるもので、穴があいたら継ぎ接ぎするということが繰り返されている。そこに継剥ぐ感性によって、美しいパッチワークのサルッパカマ（写真３）が出来上がっている。福島では、指先に乗るくらいの布は捨ててはいけないと

いう教えがあるそうだ。

写真３　昭和 30 年代のサルッパカマ

写真４　会津木綿　山田織元工場内

着古されたサルッパカマには着た人の人生が縫い込まれ、しみついている。衣服と人間の絆がそこに生まれている。ファストファッションという超消費時代の現代に、破れる度に布を重ねて縫い、また破れたら縫うという東北の人々の生活スタイルから、現代人への多くのメッセージを受けとることができる。

農作業着の開発の真髄に、愛着を感じて長く使い続けられるような服作りが課題としてある。

現在の会津木綿はむしろ着物などおしゃれ着用として使われているので、非常にカラフルになり若者にも人気の色合いが多く織られている。とはいえ、農作業着用にも人気で注文が入るという。

大正末期から昭和初期に作られたとされる豊田式織機（写真４）で織られているので、部品がなくなると１台ずつ使われなくなるという現状である。山田織元では、3.11 以来復興に協力しようという動きがあり、注文が多くあること、さらに 2013 年は NHK の大河ドラマ「八重の桜」で会津若松出身の気丈夫な女性、山本八重が取り上げられ全国的に注目されたことで、品薄状態という嬉しい話であった。

若き日の八重やその周辺に登場する人物の衣裳として会津木綿の着物が着用されたために、注文が増えた。また地域の若者たちが、会津木綿を使って服飾品や小物などの商品開発をして、会津木綿の新しい局面を切り開いていることも功を奏している。

こうした調査の結果、研究室の企画会議でサルッパカマをパンツスタイルの参考に取り上げることになった。従来から袴パンツのデザインに取り組んでいる武永佳奈がサルッパカマをテーマにした作品を担当することにした。

一方、山口の地域資源を活かした農業スタイルをデザインするために、プロジェクトを作った。まず、糸から創作するものである。復活して 10 周年の記念行事以来、筆者が振興に関わっている柳井縞の会に共同研究への参加を呼びかけた。石田忠男会長が参加することになった。

柳井縞は岩国藩の指導があり質の高い綿の縞織として江戸時代に栄え、生活スタイルの変化や機械織りなどの導入で、大正時代に消滅してしまった。今年がちょうど復活して 20 周年の年になる。手織りから機械織りになり消滅したという苦い歴史もあり、現在は手染、手織を柳井縞の特徴にしている。

現在では手染で手織ということは、疑いなく非常に高価になる。かつては柳井縞も農作業着などに用いられていたものだが、現在は木綿のおしゃれ着用に織られている。それ故に、作業着そのものを作ることは、後の商品開発提案を考えると非常にむつかし選択となる。

そこで、柳井縞を用いる作品は、作業着ではなく、6 次産業用あるいは農作業着から発展した日常のおしゃれ着用を目指すことにした。デザインのコンセプトで、柳井縞の柄や素材にオリジナリティを出すこと、さらに発表する場所の長門市の歴史や文化とのストーリーの摺合せも必要である。

そこでこの作品の素材には、長門市を代表する詩人金子みすゞの肖像写真を参考に、独特な縞織を織ることから始めることにした。柳井縞の会会長、石田忠男に、柄の他に糸にも個性を出すために和紙糸を織り込むことを提案した。

その結果、後に示す和紙糸柳井縞が織られた。さらに、衣服のアイテムとしては、実際の農作業着ではなく、作務衣風の形態で、おしゃれ着として着られるよ

うな上下アンサンブルをデザインすることにした。

さらに、2013年後期から受託研究を受けている玖珂縮の作務衣風アンサンブルを企画した。以上の２作品の上着にはハオリーナという名前を付けた。下衣はモンペ風だが、モンペッコという名前を付けた。詳しくは次章で述べる。

２．モンペの変遷と現代

筆者は2005年頃から「ルーラルファッション」という概念を考えた。なぜなら、山口から服飾文化の創造と発信を現実的に意味あるものにするためには、いわゆる都市文化であるファッションの後塵を拝するよりも、生活に密着したオルタナティブな服飾デザインを追求することの方法が大切ではないかという考えからである。

また、山口に長年暮らし都市に自然が食い込んでいる、あるいは別の言い方をすると調和している環境が魅力的に感じられたからである。市街地を流れる一の坂川には毎年６月初めには蛍が舞うのが風物詩ともなっている。

そこで、まず実際に農業従事者とのコラボレーションを考え、仁保地区の農家の方々に協力を得た。地域のキーパーソンに呼びかけを依頼し、10名程度の女性と数名の男性にインタビューをした。

そこで、30代から80代のどの年代の女性に聞いてもモンペは便利で履き心地がいいというコメントが返ってきた。その時の女性たちの顔の表情は、心底モンペが気に入っているという情熱的な表情であったことが印象的である。

人々が現在も好んで農作業着やその延長にある生活の場で着られるようになったか、またモンペの着用の意味の変遷などについて、聞蔵Ⅱビジュアル東京朝日新聞の記事から概観する。モンペに関する記述は、記事によりひらがなとカタカナが混在しており、以下では記事から参照している文章は、記事の表記に従い、一般的に記す場合にはカタカナで統一することにする。

ここでは1911年からその用語が登場している。秋田美人の姿としてモッペ（袴と股引きを合わせたもので男女がはき、デタチとも呼ばれる）(注2)をはいていることが紹介されている。また、1928年にはもんぺは男女ともがはいていること、一度これを用いたら冷え性の女性には家庭生活で必需品になること、夏は涼しく汗が出ても肌に布がへばりつかないなどもんぺの効用が記されている(注3)。

1929年の東京朝日新聞には山形県の話題で、「もんぺい姿愛らしい少學児童(注4)」という見出しがある。

地域で呼び名が異なっている。

1937年７月に中国で起きた通州事件をきっかけに日本女性の着物は非活動的なために、命を守る衣服として相応しくないという理由で、工夫が必要だということになった。そこで、改めて東北地方で使われていた野良着に注目が集まった。東京朝日新聞には野良着として作られていたもんぺのパターンと縫い方が掲載され日々の服装として普及させようとしている(注５)。

写真５　大陸へ！もんぺの花嫁20組の記事

当時は型を学び自分にあった形に直して作っていた。さらに、空襲時に着物は上記と同じ理由で、改良服が提案されたり、おしゃれな素材が使用されるなどして人々の生活に浸透し、急速に全国に広まっていった。

1937年には、結婚式には大振り袖の着用など非常に華美に向かう方向と節約に向かっていくモンペ姿の婚礼衣装についての記事もみられる(注6)。1938年のアサヒグラフには、見出しに「大陸へ！もんぺの花嫁20組」とあり、写真が掲載されている(注7)（写真５）。戦争に近づいていく中で、もんぺは非常服であるとともに、以上のように晴れの服装にも用いられたことがわかる。

民俗学者の今和次郎（早稲田大学教授）は1940年にパンツ式もんぺを婦人の家庭用の衣服に推奨して、パンツ式のもんぺを型紙を添えて紹介している。ここでもんぺはmompeと書かれるとも記している(注8)。

ファッション雑誌の草分けであり現在まで続いている「装苑」は、洋装の普及のために1936年に創刊され、1941年には休刊を余儀なくされた。休刊間際には、日本の美術や文化から発案したスタイルから洋装の合

理化が解かれた。今和次郎は創刊以来、西洋服飾史をシリーズで解説し、「装苑」を通じて、戦時中に袴スタイルのモンペから洋装化した合理的なモンペ普及に力を入れていたことが理解される。

1941 年の装苑にはファッション雑誌に「モンペのはなし(注9)」が掲載され、モンペを美しく装う方法が解説されている。さらに、秋田の女学生が勇敢にもセーラー服とモンペばき姿で登校したことが珍しい様子で語られている。さらに、物資不足の折柄、１反で２足とれることは、袴やスカート等には及びがつかないと言っている。

つまり、従来の袴式のもんぺからパンツスタイルのモンペが、合理的であり経済的であるという理由で移行したことが理解される。

第２次世界大戦後もしばしばもんぺは記事になっている。反戦活動ともんぺが繋がっていた時代を経て、戦後生まれの世代は思想的、歴史的な文脈とは関係なしに、純粋に便利だとか、快適だという理由で農作業着用に使われて来た。さらに、新興のブランドでは絣から日常着向きの生地に変えて、生活着として提供していて定着した人気があり、現在では海外にも輸出されている。

農業への関心が昨今若者の間に少しずつ広がってきた今、農作業着としてのモンペに改めて注目することには意義があると言える。

３．モンペッコの創作

袴スタイルに比べて、一般のモンペの利点は、前章の記事にもあったように、着物地１反で２着作ることが可能であることである。現代人は身長が高くなり、１反 12 ～ 13 メートルでは少し短いモンペしかできないが、いずれにしても単純で直線断ちに近い形態に特徴がある。膝から腰にかけての部分がゆったりしているので、夏場の暑い時期に生地が体につかないし、動きやすい。絣や綿の織物は夏場に涼しく、冬場には暖かいというという利点がある。

かつて、会津木綿や柳井縞さらに玖珂縮も、地域の人々の生活着であり、また農作業着に使われていたものだ。現在では、着物用の高級品になっているが、改めて地域資源の伝統である織物と人間の歴史に想いを巡らせることになった。

農業スタイルコレクションを実施するというキックオフミーティングを５月 20 日に安倍昭恵夫人を交えて実施し、それが広域に報道された。その結果、日本農業新聞から誰でもが作れるモンペを考案して記事にしてほしいという要望があった。

そこで、いったい現代にあらためてモンペとはなにかを考えた。つまり、パンツスタイルが一般化している現代において、あらゆるパンツがある。そこで、モンペの定義を考える。現代では基本的には農作業着用として市販されており、素材は絣生地が多くみられる。そして形態は膝辺りからウェストまでゆったりとしており、足首とウェストがゴムで縮められている。

以上のように形態と素材の観点と用途からモンペを定義するしかないように感じられる。もちろん、メーカーによっては、腰部に切り替えの布でヨークと呼ばれる部分があるかないかの違いはある。しかし、それはモンペの形態に関する定義にはならない。ブルージーンズの場合には、確かな定義があるが、モンペにはない。

それ故に、筆者がモンペをデザインするとしても、まず名前が必要になる。それが新しいデザインの定義にもなるのだ。そこで、全国で用いられてきたモンペの名称を調べたところ、宮城県にハカマッコという名称があった。プロトタイプを作るときの生地に、フィンランドのマリメッコに特徴のあるウニッコ柄を使ったこともあり、それらを合成してモンペッコという名称を付けて、発表することにした。３年生のゼミ生、中村正代と中濱結香がスタッフとなり、モンペッコのパターンを制作した。

日本農業新聞に掲載したパターン(注10)を基本に、山口発のデニムファッションブランドである匠山泊と山口県立大学発ベンチャー企業、有限会社ナルナセバとの共同プロジェクトで、少量の商品化を実現させた。

昭恵夫人は３年前に農業を始めた時に、友人から絣地のオーバーオールの農作業着をプレゼントされ、それを現在も着用している。こうして、今回は昭恵夫人

写真６　モンペッコプロトタイプ　マリメッコ生地

に新しいモンペスタイル、モンペッコを提案することになった。最初のモンペッコには新しい感覚を出すために、前述したようにフィンランドのテキスタイルとファッションブランドであるマリメッコのウニッコ柄を用いて、若者に関心をもってもらえるように工夫した（写真６）。

デザイン上では、まず、股上を直線にした。昨今のモンペはパンツ同様に曲線になっている。誰にでも作れるということから出発したが、結果は前後のわずかのだぶつきが、着用したときに個性を出すようになっている。次にはウェストのゴムと足首のゴムを２段にしてスタイリッシュにした。さらに、脇はステッチを入れて脇をきりっとさせた（写真７）。

出来上がったプロトタイプを、昭恵夫人に試着を依頼し、油谷でのファッションショーのためのハンティングの日に集まった人々にお披露目したところ、非常に好評であったので、次に進める価値があると判断した。

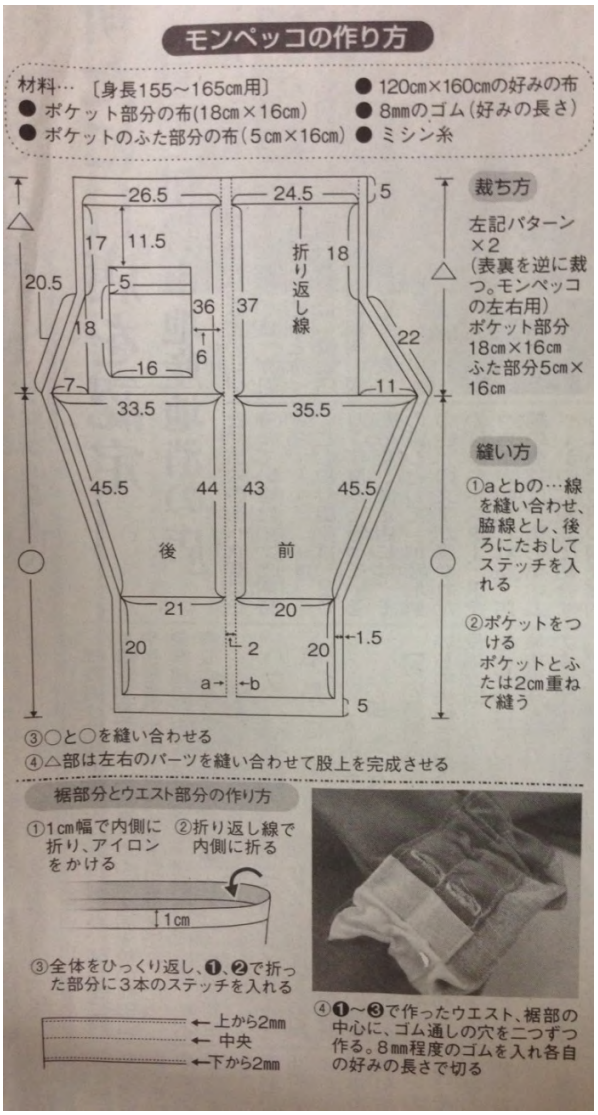

写真７　日本農業新聞掲載のモンペッコパターン

ショーで発表する柳井縞とのコラボレーション作品のために、生地の制作を柳井縞の会の石田忠男会長が、モンペッコの製造を匠山泊の岡部泰民代表が担当することになった。後に受託研究の申し入れを受け、岩国西商工会玖珂支所が支援している玖珂縮を復興する玖珂縮の会も参加することになった。

高級な手染、手織りだけでなく、気軽に着られるモンペッコを開発するために、比較的安価でストーリー性がある綿素材を用いたグローバル・モンペッコのプロジェクトも立ち上げた。同じパターンのモンペッコという器に、山口との縁のある世界の生地を乗せてデザインするものだ。

まずは、周防大島と移民で関係のあるハワイのアロハシャツ用生地、萩と高嶋北海の関係からフランスの生地２種類、東日本大震災いわゆる 3.11 をきっかけに東京から山口に移住してきたガーナ人に因んで西部中央アフリカのワックス染織の生地、学術交流提携をしているラップランド大学や研究室の卒業生がファッションデザイナーとして活躍しているフィンランドのマリメッコの生地、匠山泊の岡部代表が提案したモードとして迷彩柄、そして今回の交流先である会津若松市の会津木綿をそれぞれ使ったモンペッコを発表した。男女共通のデザインとパターンで製造した。

写真８　グローバルモンペッコ　ガーナ

写真９　グローバルモンペッコ　モード

写真 10　グローバルモンペッコ
ハワイ

写真 11　グローバル・モンペッコ
会津木綿

写真 12　モンペッコとメッセージＴシャツ

ショーでは上着のＴシャツには文字をプリントして、最後に並んだ時に、AGRICULTURE　PEACE となり、最後に YUYA と文字ができるように計画をした。このアイデアはメッセージ性を優先させたので、特に上着そのものにユニークなものをつかうわけではなかった（写真 8・9・10・11・12）。

第２部では研究室のスタッフと筆者がデザインした作品を発表した。４章以下で、大学院生の作品と筆者の作品を紹介して、作品の検証をしたいと考える。

４．ファッションショーの企画

具体的なデザインに入る前に、ファッションショー自体の企画について触れたい。

どこでファッションショーをするべきかという議論で、筆者は当初、下関を考えていたが、昭恵夫人の意見を取り入れて長門市油谷で実施することにした。油谷には日本海に面する美しい棚田があり、ここは棚田百選にも選ばれるほどの風光明媚な場所である。

しかし、この棚田を背景にしてファッションショーを実施することは不可能である。屋内の候補としては、近くの廃校になった小学校があるが、行ってみると空間が狭く今回の内容にはふさわしくなかった。そこで、いわゆるホールだが広さや駐車場などを考えるとラポールゆやがいいのではないかという結論になり、場所が決定された。

偶然、このホールは前面の階段を取り払うと平場ができて、キャットウォークが作れる施設であった。設備なども確認して場所の予約はできた。

今度は資金に関する努力が必要である。そこで、山口県立大学江里健輔学長に大西倉雄長門市長を紹介して頂き、共催の道を探った。長門市がそこで快く共催を引き受けたおかげで、場所代などが無料となった。また、広報宣伝などの手伝いを受けられることになり、

好調に滑り出すことができた。

棚田の研修に関しては６月29日に昭恵夫人一行と企画デザイン研究室一行が、油谷でのハンティングを行った。油谷のNPO法人油谷景観保存会の村岡富士夫会長と棚田百選に選ばれた棚田がある東後畑営農組合の三村健治代表に案内を受け、地域と棚田そしてそこでの農業がどのような関わりになっているかを調査した（写真13）。

写真13　油谷の棚田風景（2013年５月下旬）

長門市は東後畑営農組合に依頼して、無農薬米を育てはじめた。当日に、作り始めたばかりのこの米を紹介するために、おにぎりを作る依頼をし、交流会で出す計画をたてる。三村は非常に乗り気で、実現した。また、ロビー展示と即売をするために、ゼミ生の岡田祥実がパッケージをデザインした。

会津若松市との交流に関しては、会津若松市で現地受入のアクセンチュアで会議をした後、個人的な交流会があった。そこに、室井照平会津若松市長が参加しており、気軽な気持ちで、ファッションショーに参加する誘いをしたところ、快諾いただいた。

その後、市長のスケジュール、昭恵夫人のスケジュールさらにホールのスケジュールなどの調整をして、10月13日に決定をした。

結果として、昭恵夫人を代表顧問として、山口県立大学学長、長門市長が農業スタイルコレクションの実行委員会の顧問になり、ゲストとして会津若松市長が来山することになった。

ショーの音響照明は普段、ホールの運営管理をしているラポールゆやのスタッフが担当し、振り付けはリル・レイ・ダンススタジオのREIKOが担当した。ヘアーメイクは、昭恵夫人の友人であるメークアップアーティストのTAKAKOが東京から駆けつけて来たこと、またその友人が小倉からスタッフを連れて来たことが功を奏して、無事にモデルたちが美しくドレスアップをすることができた。

もちろん、企画運営に企画デザイン研究室の学部学生が参加しており、彼女たちの努力なしには実施は不可能であった。演出は筆者の助手として石川智香子が担当した。

企画の最後に、思ってもみないい展開があったことを記しておきたい。ショーの前日に会津若松市長の一行との交流会をした。そこで自分たちもせっかく山口まで来たのでショーに出演しようと思うけどどうかという申し出があった。

ショーに出るといっても着る服がないといけない。

当日はロビーで会津若松の物品、長門市の棚田米、そして柳井縞の小物や織物などが展示販売された。そこで、モンペッコも一部販売するために匠山泊と有限会社ナルナセバの共同製造したものがあり、その中でサイズがなんとかなるものを選ぶことにした。

ショーの当日に、市長やアクセンチュアの会津若松支所長、芦名旅館の若女将に試着をしてもらい、なんとか入る服があったことは幸いであった。ショーのプロデューサおよび演出家は何が起きても対応することができる臨機応変の柔軟さが求められるのだ。

これらはショーが開始される直前のことで、急遽、長門市長にも声をかけてもらった。そこで大西市長が自分も是非モンペ姿で出演するとの申し出があったので、ショーの最後に昭恵夫人を囲んで、長門市長とゲストの会津若松市長一行が皆モンペッコで出演することになった。

その結果は、昭恵夫人が会津若松市長をエスコートして舞台中央を歩く姿が、共同通信を通じて全国に配信された。特に、福島の地元新聞に掲載され、友人からその記事が送られてきた。会津と長州という歴史的な壁を少しでも平和に乗り越えられる手段としても少しは貢献できたかもしれない。

最後に、無農薬の棚田米を販売した売り上げはわずかであるが農業スタイルコレクション2013実行委員会から全額、会津若松市の農業振興のために寄附したことを付け加えておく。

以下では、今回制作した水津初美の帽子（４章）、武永佳奈のサルッパカマから着想を得た上下衣服（５章）そして山口の地域資源を活かした筆者の作品（６章）について紹介するとともに、商品開発としてコンセプトの結果を検証する。

５．シャレかわ Noubou（農帽）の開発

従来の農作業服や帽子は色や柄、形、素材など地味なものが多い。そこで、こんな帽子があれば農業してみたいと言う若い女性が増え、楽しい気分で作業ができそうな機能性とファッション性をもったグローバル・モンペッコに合う帽子のデザインを考えた。

帽子のアイデアを考えるために、農家やかつて農業をしていた人にどのような作業着や帽子が用いられ、今後にはどのようなものが期待されるかについてインタビューした。同時に、現在市販されているものを、店舗やインターネット通販などで調査した。

山口県の北浦地域では、男性は手ぬぐいをはちまきにし、女性は手ぬぐいをかぶり両端の一方を後ろで結ぶスタイルで農作業をしていた。『衣の民俗叢書 労働着２(注11)』に掲載されている写真の女性達もほとんどが手ぬぐいをかぶっている。帽子はかぶっていなかった。手ぬぐいのかぶり方は他にもあり姉さんかぶりと言う。ちょっとおしゃれな料理屋などで働く仲居さん達がかぶっているものと同じである。手ぬぐいは後ろで結び目を作らず挟むスタイルである。当時の人は、かぶり方(巻き方)を少し変えておしゃれをしていた。現在、農作業をしている年配者は、手ぬぐいを利用し簡単な方法で作業帽を手作りしている。

ホームセンターでは、麦藁帽子が多く、それに小花の柄のプリントがしてある薄い木綿の布が付いている。その布を付けることにより、より日差しよけや紫外線防止の対策がされている。また、この布は農作業着用としても女性が着用している。年齢は問わず、色や柄、質、形など流行がなく、ほとんど変化がない状態で作られているので、若い女性用としては少し地味に感じられる。最近流行している小花柄のシャツを見ると農作業着と間違える年配者もいた。価格は 1000 円以下のものが多く求めやすくなっていた。

インターネット通販には色や柄、形、機能性を備えたものが販売されていた。形の種類は少ない。価格は 2000 円 ~3000 円くらいである。機能性を高めつつも、布を着脱する手間がかかるものが多い。

そこで帽子デザインのために『農家の作業着 100 選裁ち方集』の「搾乳用帽子」「かぶりものの工夫」の項(注12)を参考にしてデザインをするとともに、家庭でも作りやすいように考えた。

以上のリサーチの結果を参考に、季節に応じた生地や柄、形を考慮し、現在の女性が農作業をするときに、特に防止したい紫外線と虫対策の機能を備えることを重視した若い女性用のオシャレでかわいい４種類の農作業用の帽子を制作することにした。

オシャレな帽子を映画の中の女優がかぶっていた帽子からイメージした。つばの広いエレガントな帽子から着想を得、養蜂用の作業帽を参考にした。帽子本体は通気性の良い木綿を使用し、養蜂用の作業帽の網の部分をふんわりとしたレースにして農作業用帽子にはなかったオシャレ感を出すことにした。最初この部分には、風通しと日焼け防止を考えて UV 加工のレースのカーテンを使用したが、実際に手に取り見てみると UV 加工により普通のレースのカーテンよりゴワゴワしておりイメージしていたものと違っていたことと、レースの部分は日差しをカットしないのではないかと聞き、他の素材を検討することにした。

織り目の細かいレースを使用することにより風を通し、日差しを和らげることができる。裾を絞ることにより小さな虫の侵入を防ぐことができる（写真 14）。

写真 14　シャレかわ NouBou Ⅰ　農帽

写真 15　シャレかわ NouBou Ⅰ
お出かけ帽

帽子のつばの広い方を後ろにすることで首の後ろ周りの日焼け防止になる。また、つばの広い方を前にし

てレースの部分をくるくる巻き込めば、街にもかぶっていける可愛い帽子に変わる。レースの部分はブライダルのように見えないように格納した（写真 15）。

作り易さとかわいらしさを考えて、四角い生地を半分に折り頭巾にし、日ざしよけ用につばをつけ、ひもを調節して結ぶことにより何通りかのかぶり方ができる。裾に刺繍をあしらった肌触りの良い生地を選び、軽めの農作業用として制作した。つばは、日差しや紫外線から肌や目を守るために徳地手漉き和紙を使用しレースでくるんだ。和紙は目に優しい光を通し、紫外線をカットする特徴をもっている。（写真 16，17）

写真 16　シャレかわ NouBou Ⅱ
軽作業農帽

写真 17　シャレかわ NouBou Ⅱ
紫外線防止仕様　農帽

昭和 40 年代に考案された頭巾型の農作業用帽子を楽しく元気に農作業ができるようにマリメッコの生地を使用し可愛く仕上げた。アクセントに黒のバイヤステープで パイピングした。虫や日差しを防げるようにリボンで締める。つばの部分の中に徳地手漉き和紙を使用した（写真 18，19）。

写真 18　シャレかわ NouBou Ⅲ　前

写真 19　シャレかわ NouBou Ⅲ　後

身近にある素材で簡単に作れる農作業用帽子の制作に、肌触りがよく、濡れた手や汗がふけ、汚れたら何度も洗濯ができるタオルを使用した。タオルをつなげ、スナップで２箇所止めるだけで、日差しが強い時は、広めのつばの麦藁帽をかぶる。作業内容によっては手ぬぐいバージョンもあると良いと考える（写真 20，21）。

写真 20・21　シャレかわ NouBou Ⅳ　装着前と装着後

これらの作品はグローバル・モンペッコの作品にフィットさせてショーで発表した。

今後の課題は、実際に使用してもらった感想を聞き、より機能的でオシャレでかわいい帽子を創作することだ。このようなスタイルから農業への関心を持つ若い女性が増え、減り続けている農業の担い手が少しでも増加すればと考える。

６．袴パンツ×サルッパカマ

筆者は山口市徳地地域に伝わる野良着を現代風にデザインした袴パンツを 2010 年よりシリーズで制作してきた。そこで今回、会津若松市とのコラボレーションをするにあたり、会津若松の伝統的な野良着であるサルッパカマをリデザインし、上着も合わせより機能的でオシャレな野良着を制作することを目指した。

会津若松のサルッパカマは農良作業用および農良山作業用があり(注13)、用途により多少デザインは異なるが１章でも述べたように山口のモンペと比べるとヒップの周りにゆとりがあり、太ももが締まったデザインであることが特徴的である。

農業をする際、しゃがんだ姿勢をとることが多いため、ヒップのゆとりがあると非常に動きやすい。また太ももが締まっていることで泥が入りにくく、冷気も入らないので暖かいのである。

太ももあたりから前と後ろに分かれているパンツをまず前から後ろに腰紐を回し結んだあと、後ろからウェストの前で結び着用する。

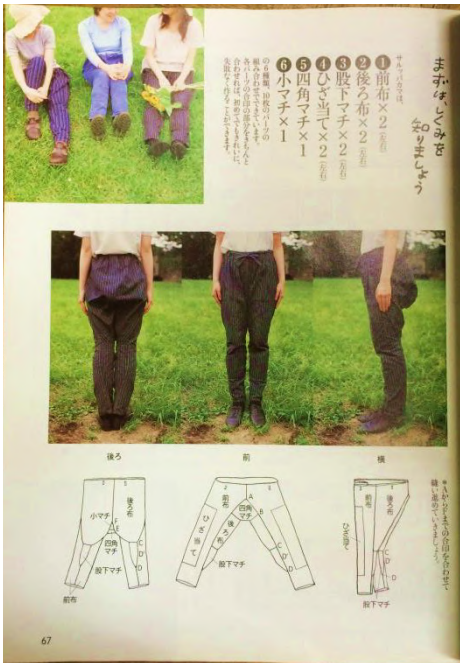

写真 22　基本のサルッパカマ

形以外の点においてもサルッパカマは特徴的で、そのパターンは前布、後ろ布、膝当て、四角マチ、股下マチ、小マチ、ベルト通し、腰紐でその全てが四角形と三角形の組み合わせのみで構成されている。その為、直線縫いだけで制作でき、無駄布が非常に少ない(注14)（写真 22）。

上記のように形やパターンにおいて機能的なサルッパカマであるが、見た目には野暮ったさが残る。

横から見ると極端にヒップが飛び出て見え、不恰好であるし、それとは逆にウェスト周りは生地が吊ったような印象がある。

筆者が制作した袴パンツを検証すると、前後で結ぶ腰紐での着脱は現代ではなじみが薄く不便であることが課題であった。この同じ問題がサルッパカマにも伺える。さらに、前に垂れた紐が作業時には邪魔になるという問題もあった。

また、生活者の視点から求められる機能が何かを明らかにするために、農家やガーデニングをする人々に聞き取り調査を行った。その結果、草取りや作業で膝をつくことが多く、膝当てに対する要望が多かった。

研究室での企画会議で膝を地面に当てて作業をしても痛くない膝当てのお洒落なデザインを考案することも方針として定めた。

こうした問題点を解決することと、デザイン上でよりスタイリッシュなイメージを表現できるように、基本のサルッパカマのパターンを改良し、全体をリデザインした（写真 23，24）。

サルッパカマをリデザインしたパンツ２点と山口で使われていたタイプのモンペを着想源にした作品を１点制作した。それらのパンツに合わせた上着も３点制作した。

素材には会津木綿を使用した。会津木綿は会津地方の生活の中に根付いた織物である。400 年ほど前、領主であった蒲生氏郷が産業復興のために綿花の栽培を推奨し、木綿を織らせたことが始まりだと言われている。サルッパカマの素材としても古くから用いられてきた。

通気性や吸水性の良い夏向きの生地である。そのために、冬用の作業着には、昭和 30 年代の事例では、布が何重にも重ねられて作られていた（写真 3）。筆者は、キルティングで裏打ちすることで、防寒対策を施すデザインにした。

ウェスト部分はゴムにし、前にタックを寄せた。そのことで、後ろで出っ張る余分な生地が前へ流れ、過剰に張り出した臀部の布のボリュームが軽減された。

写真 23　Nora Quilting 山口モンペタイプ

写真 25　Nora Quilting
サルッパカマ膝当て強化タイプ

写真 24　Nora Quilting　サルッパカマタイプ

タックの間にゴムを通すことでデザイン性がありながらスッキリとしたウェスト周りになった。

またこのゴムには作業中、軍手やスコップなどを挟むことが出来、機能性にも一役買っている。

膝当ては元のデザインのままキルティング加工によりクッション性を高めたものと砂利の上などに膝を付くことを想定し、よりクッション性を強化したものの２パターンを制作した。

強化した方の膝当ては必要のない際はクッションを取り外せるようにポケット仕様にした。このポケットには作業時に必要な小物を入れることも可能である（写真 25）。

上着は腕を動かしやすい袖の切り替え方を意識して制作した。山口県農林総合技術センターに所蔵されていた資料(注15)を参考に一番農家での使用時の評判が良かった見頃と袖のつながったデザインを採用し、脇下のみ別布で切り替えた。

キルティング加工に因み筆者は制作した作品のシリーズを Nora Quilting と命名した。Nora Quilting はキルティング加工を施したことにより生地に立体感が生まれ、今までのサルッパカマとは異なった風合いに仕上がった。

このような素材感の変化を野良着以外の商品開発にも展開させていきたいと考える。

サルッパカマや会津木綿のような地域資源を現代のニーズに合わせ検証し、リデザインした地域オリジナルの機能的でオシャレな野良着を、昭恵夫人がモデルとなって農業スタイルコレクション 2013 で発表することが出来た。

昭恵夫人は 3 年前から農作業をしているということもあり、モデルとして非常に生き生きと発表されていた。

作品が作業着でもありおしゃれ着でもあるというイメージがしっかりと立ち上がったようだ。こうしたものづくりを山口と会津若松のような地域間で連携しながら進めて行くことに強い可能性を感じた。

7．AKIE × YUMIKO プロジェクト

①ハオリーナ＆モンペッコー和紙糸柳井縞×金子みすゞ

日本の着物は現在でいうところのサスティナブルな衣類である。まずは、1 反の布を 7 回切って、8 つの部分にするが、ほとんど端切れが出ない。着用者の体型に合わせるために、織り込んだり縫い込んだりして調整し、洗ったり、他の人に着せる時に、ほどいてまた縫う作業を繰り返すことができる。

要するにきわめて調整可能な服である。洋服は人の体に合すので、かなりの端切れが出ることと、もとの 1 枚に戻すことは至難の業である。

それ故に、なるべくサスティナブルに作るために、モンペッコに組み合わせる上着は、作務衣のように直線断ちの形態がよいのではと考えた。若い女性をターゲットにした場合に、興味をもたれるかと考えた。祭りの時に甚平スタイルの服装を 10 代後半の女性が着る姿を多くみかける。それ故に、作務衣スタイルでも関心をもってもらえるのではないかと判断した。そこで上着に愛称をつけようと考え、羽織に近いことからハオリーナにした。

まず、1 反の生地を織る必要がある。そこで、平常の柳井縞の綿の糸は経糸に使い、緯糸に和紙糸を作る必要があった。そのために、福山市にある備後撚糸株式会社を柳井縞の会の石田忠男会長と訪問し、糸作りから依頼をした。

長門市で実施するので何らかの関わりを求めたが、地元には服飾文化に関す産業がないために、別の角度からストーリーを考える必要があった。そこで、長門市を代表する童謡詩人金子みすゞの存在を思いついた。みすゞの肖像写真は数枚残されている。今回は縞柄が重要な点である。そこで、よく使われているみすゞの肖像写真（写真 26）は白黒で色ははっきりわからないが、ユニークな縞柄の着物を着ていることはわかる。

そこで、地色は藍色と決め、縞柄を白に決めた。さらに柳井縞とのデザインの統合で、石田のアイデアで少し薄い青色の縞柄を間に差し挟んで、オリジナルな反物が出来上がった。

非常に品があり、少し厚手の生地が織りあがってきた。その時には普段の柳井縞よりもインパクトを感じさせたのである。

実際のショー最後の作品として昭恵夫人がモデルになって発表した（写真 27）が、よく似合っていた。もちろん、糸から仕上げたハオリーナ＆モンペッコはプロトタイプとして問題はないが、商品開発となると非常に高価なものになるので、簡単に量産化することはできない。

写真 26　20 歳の金子みすゞ

地域の資源を活かしたオリジナルな服飾デザインを地域の人々に着てもらいたいという目的を、どのように現実化するかはいつも問題である。しかし、今回の研究目的は商品化に繋げることである。

そのための研究がこれから始まる。

②ハオリーナ＆モンペッコ玖珂縮

柳井縞の復興とほぼ似た時期に、玖珂縮の復興活動

写真 27　ハオリーナ＆モンペッコ
和紙柳井縞×金子みすゞ

が、地域の人々によって岩国西商工会玖珂支所を拠点に行われた。復興のためのプロジェクトで、デザイナーを招聘したために、本来は縞柄とは関係はないのだが、デザイナーのアイデアで、縞柄の縮が織られた。

長年、反物は織られたまま何かに役立てることがなかったので、これから再度、商品開発をしようと玖珂縮の会が再度結成された。

そこで、筆者に受託研究として依頼がきた。最初の話し合いで、玖珂支所の担当者が持参した反物を見て驚いた。縮の生地にはあまり馴染みがなかったのだが、独特の風合いと織デザインに魅了された。

ちょうど、油谷のファッションショーを準備していた時だったので、ハオリーナとモンペッコの作品に使おうとすぐに計画を立て、ショーでは柳井縞とコンビで発表した（写真 28）。両者ともにハオリーナはゼミ生の原田真衣が、モンペッコは匠山泊が制作した。

実際に、玖珂縮の反物は１人の織手が急ぎ織っても２か月はかかり、ゆっくりと暇にまかせて織った場合には６か月もかかるという。人件費を考えたら異常に高価なものになるのだ。

今回の受託研究のテーマは、商品開発ということである。岩国西商工会玖珂支所での会議での話合いで、まずはどの規模で復興させるか、プロトタイプができたら機械化をするのかどうか、商品の流通、販売などについて議論をした。

そこでのコンセンサスは見通しがつけば、機械化をするという意向であった。まずは、きちっとブランディングをして行こうということで、現段階ではすぐに何を商品化するということは決まっていない。

しかし、徐々に現実性のあるものから具体化して行こうという共通の話し合いができたことで、進んでいけるのではないかと考える。

また、樫部正樹 NPO 法人にっぽん ing 協会理事長が、日本の手織り産地を繋いで、手織りの素晴らしさを検証するプロジェクトを立ち上げようと、助成金を申請中である。丹波篠山の丹波木綿、柳井縞そして玖珂縮を繋いで、今後、産地の人々が繋がりながら日本の伝統を大切に守りつつも、継続して行くための手法を皆で考えて行こうとしている。

筆者もこのプロジェクトに関わっており、伝統を維持していくことと発展させることの上に立ちはだかる

写真 28　ハオリーナ＆モンペッコ　玖珂縮

大きな壁をどのように乗り越えていくかという挑戦について、地域の人々と考えて実行して行きたいと考える（写真 28）。

まとめ

今回は商品開発を視野に入れて、1 次産業から 6 次産業までの幅のある現代の農業スタイルを考え、作品を制作した。その中でもモンペッコについては山口縁の海外の国に特色がある生地を用いて商品を開発した。サイズはＭとＬで、男女共用で制作した。

ファッションショーではそれらが男女共用でも大丈夫であったので、日本に入って来た当初のジーンズのように、ユニセックスとして位置づけることが可能である。

主に、地域資源を活かして制作したハオリーナ＆モンペッコのアンサンブルで、柳井縞と玖珂縮を用いた。特に長年振興に関わっている柳井縞はまったくオリジナルの布の糸から企画して制作した。和紙糸を織り込んでいることもあり、少し厚手の布になった。しかし、ハオリーナはジャケット的に着るアイテムであるために、その厚さ風合いは適当であった。

しかし、手染、手織を特徴とする柳井縞は非常に高級であり、商品開発としては量産を視野に入れるのではなく、注文生産としてアピールしていけることを考えている。

今回はまずは山口発の農作業スタイルコレクションを発信することが目的だったので、地域資源を用いてやや高級で、6 次産業としての農業に関わるシーンやおしゃれ着を中心に商品化した。

今後の課題は、1 次産業から 6 次産業までの幅で用いられる比較的適切な値段の商品開発を考えて行きたいと考える。そして、一定の量産化をして、販売までの流れをプランニングできるような道筋をデザインと同時進行に実施しようと考えている。

最後に本研究に共同研究者として参加された安倍昭恵内閣総理大臣夫人をはじめ、山口県立大学の江里健輔学長・理事長、大西倉雄長門市長、室井照平会津若松市長さらにラポールゆやのスタッフや関係各位のみなさんに多大なるサポートをして頂きました。この場をお借りして心からお礼申し上げます。また山口県内における農作業着の資料収集に関して山口県農林水産部農政水産政策課吉武和子氏および関係者に指導を受けた。

●注

1 ブランドイメージ刷新のヤンマー　農作業服もファッショナブルに「ファッション・アパレルのニュース」http://www.apalog.com/report/archive/2075
2013 年 7 月 30 日取得。

2 秋田たより（5）「東京朝日新聞」（朝刊）、1911 年 5 月 27 日、4 ページ。

3 健康新道・衣服の巻き　『もんぺ』の効用　「東京朝日新聞」（夕刊）　1928 年 1 月 24 日、2 ページ。

4 早春の雪國巡禮（1）もんぺい姿愛らしい小學児童「東京朝日新聞」（朝刊）1929 年 1 月 9 日、7 ページ。

5 和風と洋式のもんぺ非常服　これなら活動自在「東京朝日新聞」（朝刊）1937 年 9 月 27 日、10 ページ。

6 現代結婚風景　婚礼衣裳の巻き　上　華美と節約とのふたつの流れ　進歩した娘さんの審美眼「東京朝日新聞」（夕刊）1937 年 3 月 3 日、4 ページ。

7 大陸へ！もんぺの花嫁 20 組　「アサヒグラフ」1938 年 11 月 9 日　783 号、22 ページ。

8 今和次郎　衣服改良の試案（3）パンツ式もんぺ婦人の家庭用に勧めたい「東京朝日新聞」1940 年 1 月 24 日（朝刊）、5 ページ。

9 匹田琳子　「もんぺのはなし」『装苑』1941 年 2 月号、21 ～ 22 ページ。

10 水谷由美子　「手作りに挑戦　直線基調に格好よく」『日本農業新聞』　2013 年 6 月 20 日、12 ページ。

11 高橋春子，後藤信子編著『衣の民俗叢書 労働着 2』明玄書房、1962 年、344-377 ページ。

12 農林省生活改善課編「搾乳用帽子」「かぶりものの工夫」『農家の作業着 100 選裁ち方集』　農山漁家生活改善研究会、1972 年、106-107/214-221 ページ参照。

13 ふくしま教育情報データベース
http://is2.sss.fukushima-u.ac.jp/fks-db/pic/20046.001/20046.001.00017.html　2013 年 7 月 13 日取得

14 林ことみ監修「はたらきものの作業服　会津のサルッパカマを作りませんか」『暮らしの手帖』23 夏 暮らしの手帖社、2006 年、67 ページ。

15 「みかんの摘果作業衣の形態及び地質に関する実験」『生活改善専門技術資料専技資料』No.22 山口県農林総合技術センター、1962 年、46-65 ページ。

●作品担当者リスト

・モンペッコ・グローバル　デザイン・素材プロデュース：水谷由美子　パターン：中濱結香・中村正代（山口県立大学国際文化学部文化創造学科３年）　プロダクト：匠山泊

・モンペッコ＆ハオリーナ　柳井縞＆玖珂縮　企画・デザイン：水谷由美子　柳井縞織：石田忠男（柳井縞の会会長）　玖珂縮（岩国西商工会玖珂支所　玖珂縮を復興する会メンバー）　プロダクト：ハオリーナ　原田真衣（山口県立大学国際文化学部文化創造学科４年）　モンペッコ：匠山泊

・Nora Quilting　デザイン・制作：武永佳奈（山口県立大学大学院国際文化学研究科２年）

・シャレかわ NouBou　デザイン・制作：水津初美（山口県立大学大学院国際文化学研究科２年）

●写真リスト

写真１　昭恵夫人　オーバーオール農作業着　撮影：SEVEN CREATIVES
写真２　昭恵夫人　トラクターで作業中　撮影：SEVEN CREATIVES
写真３　昭和30年代のサルッパカマ　撮影：水谷由美子　2013年６月21日
写真４　工場山田織元　撮影：水谷由美子　2013年６月22日
写真５　大陸へ！もんぺの花嫁20組記事ページ　『朝日グラフ』1938年11月９日（通常号783号）、22ページより転載
写真６　モンペッコプロトタイプ　撮影：水谷由美子　2013年６月13日
写真７　日本農業新聞に掲載のモンペッコパターン　「日本農業新聞」2013年６月20日、12ページより転載
写真８　グローバル・モンペッコ　ガーナ　撮影：志賀敏彦　2013年10月13日
写真９　グローバル・モンペッコ　モード　撮影：志賀敏彦　2013年10月13日
写真10　グローバル・モンペッコ　ハワイ　撮影：志賀敏彦　2013年10月13日
写真11　グローバル・モンペッコ　会津木綿　撮影：志賀敏彦　2013年10月13日
写真12　メッセージＴシャツ　撮影：志賀敏彦　2013年10月13日
写真13　油谷棚田　撮影：水谷由美子 2013年５月25日
写真14　シャレかわ NouBou Ⅰ　農帽　撮影：水津初美　2013年10月24日
写真15　シャレかわ NouBou Ⅰ　お出かけ帽　撮影：水津初美　2013年10月24日
写真16　シャレかわ NouBou Ⅱ　軽作業農帽　撮影：水津初美　2013年10月24日
写真17　シャレかわ NouBou Ⅱ　紫外線防止仕様　農帽　撮影：水津初美　2013年10月24日
写真18　シャレかわ NouBou Ⅲ　前　撮影：水津初美　2013年10月24日
写真19　シャレかわ NouBou Ⅲ　後　撮影：水津初美　2013年10月24日
写真20　シャレかわ NouBou Ⅳ　装着前　撮影：水津初美　2013年10月24日
写真21　シャレかわ NouBou Ⅳ　装着後　撮影：水津初美　2013年10月24日
写真22　基本のサルッパカマの形と部位　撮影：武永佳奈　2013年12月15日
写真23　Nora Quilting 山口モンペタイプ　撮影：志賀敏彦　2013年10月13日
写真24　Nora Quilting　サルッパカマタイプ　撮影：志賀敏彦　2013年10月13日
写真25　Nora Quilting　サルッパカマ膝当て強化タイプ 撮影：志賀敏彦 2013年10月13日
写真26　20歳の金子みすず（大正12年５月撮影　写真提供：金子みすゞ著作保存会）「やまぐち探訪」http://www.buchi-umai.jp/yamaguchi/yamaguchi05.html から転載
写真27　ハオリーナ＆モンペッコ 和紙柳井縞×金子みすゞ 撮影：志賀敏彦 2013年10月13日
写真28　ハオリーナ＆モンペッコ　玖珂縮　撮影：志賀敏彦　2013年10月13日

参考資料 「農業スタイルコレクション 2013 in 長門油谷 with 会津若松」のプログラム（広告ページを除く）

農業スタイルコレクション 2013 in 長門油谷 with 会津若松

農作業着ファッションショー

共同研究者：安倍昭恵内閣総理大臣夫人

日時：2013 年 10 月 13 日（日） 開場 14:30 開演 15:00

場所：ラポールゆや

〒759-4503 山口県長門市油谷新別名 833 0837-33-0051

主催：農業コレクション 2013 実行委員会 × 山口県立大学企画デザイン研究室

共催：長門市

協賛：山口県立大学グローバル人材育成推進事業 田中奈津子

協力：会津若松市 会津木綿山田織元 アクセンチュア (株) (有) 会津食のルネッサンス
ラポールゆや NPO 法人油谷棚田景観保存会 東後畑営農組合 東後畑食育グループ
柳井縞の会 匠山泊 岩国西商工会玖珂支所 備後撚糸 (株) (有) ナルナセバ
山口ファッション＆テキスタイル研究所 Y-FATI (株) ブルーワークスカンパニー
Studio Ray 山口メディア研究所 山口県中山間地域元気創出事業（集落支援事業）
下関市立大学「みんなのまち・むら応援隊」 (株) うるとらはまいデザイン事務所
山口県立大学国際文化学部文化創造学科・附属地域共生センター

主催者あいさつ

水谷 由美子（農業スタイルコレクション 2013 実行委員会代表
山口県立大学国際文化学部・大学院国際文化学研究科教授）

山口県立大学企画デザイン研究室は安倍昭恵内閣総理大臣夫人とは 2006 年に宮中晩餐会用イブニングドレスの創作に関する共同研究を実施しました。その後、昭恵夫人が農業を始められ、適当な農作業着がない、また日本の若者に農業に興味をもってもらうのに、ファッションから入るのがいいのではないかという考えを聞き、かねてより農作業着に着想を得たルーラルファッションショーに取り組んできた筆者の考えと一致して、今回の農業スタイルコレクション 2013 の共同研究を開始することになりました。

まず調査として、昭恵夫人や地域の農業者から機能面の聞き取りをしました。素材には、地域資源の染織品とデニムを使用し、若者が興味を持てるような斬新なデザイン提案をします。さらに、伝統的なモンペをリデザインした“モンペッコ”と羽織風ジャケット“ハオリーナ”を商品開発として発表します。

山口県立大学では昨年からグローバル人材育成推進事業に取り組みインターローカル人材を育成しています。今回のショー前半のグローバルモンペッコのコーナーはこの事業から発案されたものです。

ファッションショー運営に関して、農業スタイルコレクション実行委員会を設置し顧問として安倍昭恵夫人を筆頭に山口県立大学江里健輔学長、長門市大西倉雄市長にご指導を頂きました。東日本大震災により打撃を受けた福島の農業復興への思いから会津若松市室井照平市長をゲストにお招きし、会津若松市との交流をします。

作品制作として会津木綿山田織元（会津若松市）、地域発デニム・アパレルブランド匠山泊（山口市）や今年、伝統染織「柳井縞」復興 20 周年を迎えた柳井縞の会（柳井市）、玖珂縮み再生事業に取り組んでいる岩国西商工会玖珂支所（岩国市）および備後撚糸株式会社（福山市）などの協力を得ました。

NPO 法人油谷棚田景観保存会の案内により棚田の現状を調査しました。その結果、企画デザイン研究室では山口県中山間地域元気創出事業（集落支援事業）の一環で東後畑食育グループと棚田を活かした油谷のブランディングに取り組んでいます。同時に東後畑営農組合や下関市立大学「みんなのまち・むら応援隊」とのタイアップもしています。

最後になりましたが、この度は当事業開催にあたりご協力を頂きましたすべての個人および各機関の皆様、当企画にご理解を頂きまして、ご寄付を頂きました個人および企業の皆様にこの場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

共同研究者あいさつ

安倍 昭恵（安倍晋三内閣総理大臣夫人）

下関市安岡で米作りを始めて 3 年になります。土に触れ、季節の移り変わりとともに稲の成長を見届けることを楽しく思っておりますが、都会の若い人達にも田植えや稲刈りに声をかけると、多くの人が遠路はるばる手伝いに来てくれるので驚きます。最近では農ガールや野ギャルといった言葉も聞かれますし、農業に関心のある若者は想像以上に多いのかもしれません。企業でも社内のコミュニケーションやリフレッシュの機会として農業を活用しており、農業を見直す機運が高まっているように感じております

このような気運の中、若者達に農業をより身近に感じてもらうためにも、「ファッション」は欠かせない要素だと考えています。農作業に必要な動きやすさを兼ね備えたオシャレな農作業着が広まれば、日常生活にも取り入れられ、農作業が特別なものではなく、ライフスタイルの一部となるかもしれません。

本日のファッションショーを通じて、魅力的な農作業着が広まり、一人でも多くの方に農業を楽しんで頂くことが出来れば嬉しく思います。ぜひ最後までお楽しみください。

山口県立大学長　江里 健輔

「農業スタイルコレクション 2013 in 長門 with 会津若松」が長門油谷で開催されることになりました。

山口県立大学は「地域貢献型大学」を旗印に、山口県内各地に公開講座をはじめ多種多様なプログラムを展開し、地域マインドを持った人材の養成に努めてまいりました。このコレクションは山口県立大学の知的財産を地域に還元し、地域の方々が本学を理解して頂く絶好な機会でもあります。山口県立大学企画デザイン研究室では、2006 年以来、安部昭恵内閣総理大臣夫人との共同でいろいろな研究を実施しており、このイベントも、昭恵夫人が自ら農業を始められ、着る適当な服がないという理由で、本学水谷由美子教授とともに発案されたものであります。素材には山口、会津の資源が用いられていることより、地域活性化の一助となり、併せて、これからの農業に夢を馳せて頂ければ幸甚であります。

最後にこのコレクションの開催にご支援下さいました関係者に心よりお礼申しあげます。

長門市長　大西 倉雄

このたび「農業スタイルコレクション 2013in 長門油谷 with 会津若松」が開催されますことを心からお慶び申し上げます。

現在、日本の農業を取り巻く環境は極めて厳しいものとなっています。本市においても後継者不足等により多くの農地が休耕田や放棄地になっている現状です。このような状況の中で、本市では、今年度から「ながと成長戦略」の一環として、農薬・肥料・除草剤を一切使用しない自然栽培米等の供給基地化を目指し、日本棚田百選で有名な油谷後畑地区で実証実験を行っております。地域資源を活かした新しい農業スタイルのファッションショーと、こうした本市の取組が融合することにより、若い世代が農業に興味の目を向けてくれることを大いに期待するところです。

終わりに、安倍昭恵夫人、会津若松市をはじめ、様々な方の思いがひとつとなった農業スタイルコレクションのご成功と、本日お集まりの皆様方のご健勝を祈念申し上げ、お祝いのことばとします。

会津若松市長　室井 照平

このたび農業スタイルコレクション 2013in 長門油谷が開催されますことは誠に喜ばしく、心よりお祝いを申し上げます。

会津木綿は約400年の歴史を持ち、素朴ながらも美しい縞柄が特長の民芸織物であります。厚手で保温性、吸汗性に優れ、寒暖の差が激しい会津では古くから農作業着として使用されてきました。近年では伝統的工芸品として巾着や財布などの小物や土産品などに仕立てられておりますが、ＮＨＫ大河ドラマ「八重の桜」で綾瀬はるかさんらが着用し、さらには、多くの皆様からの応援により、再びその丈夫さや懐かしさが注目を集めるようになってきました。

このたび、山口県の柳井縞や玖珂縮みなどの素材とこの会津木綿がコラボすることによって、地域から新しいファッションを発信し、新たな農業スタイルの構築を目指していくことは、大変意義深いことであると考えております。このファッションショーを通して、地域の織物の可能性がさらに拡大するとともに、農業と地域産業の振興が図られることをご期待申し上げるものであります。

結びに、本ファッションショーの開催にあたりご尽力を賜りました山口県立大学はじめ実行委員会の皆様に心より感謝を申し上げ御礼のご挨拶といたします。

山口県総合企画部長　藤井 哲男

安倍昭恵内閣総理大臣夫人をお迎えし、農業スタイルコレクション 2013 in 長門油谷 with 会津若松が開催されるにあたり、一言お祝いを申し上げます。

中山間地域は、食料生産はもとより、油谷地域の棚田に代表される美しい景観や伝統文化などが受け継がれているかけがえのない地域ですが、産業活動の低迷など多くの課題に直面しています。

このため、県では、大学生の皆さんの発想や行動力を地域づくりに活かし、中山間地域の元気創出を図る目的で「中山間地域元気創出総合支援事業（集落支援事業）」を実施しており、本年度は、本ファッションショーを含め県内２０地域で活動が展開されています。

本日は、山口県や会津若松の伝統素材を活かし安倍昭恵夫人と山口県立大学企画デザイン研究室の共同研究により開発された新たな農作業着が披露されるわけですが、デザインと機能性に優れた衣装が、若い人たちの農業に対する関心を喚起することにつながるものと期待しております。

◎ファッションショー プログラム

・プロローグ

安倍 昭恵、室井 照平、大西 倉雄、水谷 由美子によるオープニングセレモニー

第一部

・モンペッコ・グローバル with 匠山泊

モンペッコが結ぶインターローカルな人の “わ”

テキスタイル：ガーナ、フィンランド、フランス、ハワイ、会津若松、モード（迷彩）

デザイン：水谷 由美子　　パターン：中濵 結香、中村 正代　　Ｔシャツデザイン：齊藤 輝

プロダクトプロデュース：岡部 泰民（匠山泊）

プロダクト：吉安 榮子（株式会社ブルーワークスカンパニー）

（モデル　安野 美保、池口 未来、一木 幸之佑、内山 智晴、小野 飛鳥、甲斐 少夜子、桑原 彩、越口 こずえ、坂 麻子、長野 葵、橋本 英里、春山 実咲、藤村 侑未香、本光 繭衣、山本 遥、Carla Rumbado、Ferran Galicia Josep、Ferran Galicia Santiago）

「シャレかわ NouBou」　水津 初美（山口県立大学大学院国際文化学研究科２年）

第二部

・会津若松プロデュース

「For Workers Original "Linen Origami Apron / gray」

「For Workers ×　Lee "Over All Apron/ navy & white」

（モデル　合志 みき、杉山 敏美、松本 恵美子）

・会津若松文化 × 山口デザイン

「KASANE × Agri-fashion」　原田 真衣（山口県立大学文化創造学科４年）

（モデル　春山 実咲、藤村 侑未香、山本 遥）

「袴パンツ × サルッパカマ」　武永 佳奈（山口県立大学大学院国際文化学研究科２年）

（モデル　安倍 昭恵、越口 こずえ、橋本 英里）

・山口スタイル

「SMART LADY」　佐藤 亜紀子（山口県立大学文化創造学科４年）

（モデル　桑原 彩）

「ワークツーピース」　中濵 結香（山口県立大学文化創造学科３年）

（モデル　坂 麻子）

「2way overalls」　中村 正代（山口県立大学文化創造学科３年）

（モデル　池口 未来）

「和紙 × 縮 モンペッコ」　中濵 結香、中村 正代（山口県立大学文化創造学科３年）

（モデル　Carla Rumbado）

・油谷スタイル

「油谷棚田カフェエプロン」　皆川 未都（山口県立大学文化創造学科４年）

（モデル　安野 美保、一木 幸之佑、小野 飛鳥）

・AKIE×YUMIKO プロジェクト
「ハオリーナ＆モンペッコ　和紙糸柳井縞 × 金子みすゞ」
「ハオリーナ＆モンペッコ　玖珂縮」
素材・企画プロデュース：水谷 由美子　糸提供：光成 明浩（備後撚糸株式会社）
染織：石田 忠男（柳井縞の会会長）　縮プロデュース：岩国西商工会玖珂支所
服飾デザイン：水谷 由美子
パンツ制作：岡部 泰民、吉安 榮子　ジャケットパターン・制作：原田 真衣
（モデル　安倍 昭恵、河崎 眞弓）

・フィナーレ

・トークセッション
安倍昭恵夫人とのつながり　～これまで と これから～

◎ロビー展示と即売会（山口側の売り上げの一部を福島農業復興支援とします）

・会津野コレクション	会津若松の生活小物
・柳井縞の会	柳井縞を使用した小物
・匠山泊	デニム小物、筆入れなど
・ナルナセバ	モンペッコ、デニムタイ風パンツ with 柳井縞、デニム小物など
・東後畑営農組合＋下関市立大学	棚田米を使ったおいしいごぱん
・東後畑食育グループ＋山口県立大学	油谷産「ひとめぼれ」

◎スタッフ

総合ディレクター	水谷 由美子（山口県立大学国際文化学部・大学院国際文化学研究科教授）
共同企画	安倍 昭恵
作曲・音楽監督	田村 洋（山口県立大学国際文化学部教授）
音響・照明・舞台美術	ラポールゆや（宮崎 篤、大田 力、末廣 活巳、百合野 卓朗）
ステージング	REI・KO（リル・レイ・ダンススタジオ）
ヘアーメイク	石井 貴子（FamilyTakako 代表取締役）・井手 弓（アシスタント）
映像撮影	山口県立大学、山口メディア研究所
写真撮影	志賀 敏彦（バクフォトオフィス）
撮影協力	Rachel Brandon
衣装提供	西脇 末美 (サロン・ド・エミール)
MC	浅海 和花奈（山口県立大学エトワール放送局）
舞台スタッフ	佐々木 勇人・手嶋 優衣佐（山口県立大学エトワール放送局）
ブーススタッフ	岡田 祥実・齊藤 輝（山口県立大学文化創造学科４・３年） 淺田 陽子・木村 和枝・松永 美代子（山口ファッション＆テキスタイル研究所 Y-FATI） 荒木 麻耶（文化創造学科２年）河島 萌（国際文化学科１年）
グラフィックデザイン	石川 智香子・岡田 祥実（山口県立大学文化創造学科４年）
企画・運営スタッフ	石川 智香子・岡田 祥実・佐藤 亜紀子・原田 真衣・皆川 未都 齊藤 輝・中濵 結香・中村 正代（山口県立大学企画デザイン研究室）
長門市スタッフ	企画政策課　堀 俊洋（課長補佐）平川 慎太郎（主幹）吉永 勝洋
会津若松市スタッフ	秘書広聴課　加藤 隆雄（課長）
山口県スタッフ	中山間地域づくり推進課　松本 典久（課長）田村 尚志（主幹） 萩県民局　上村 正美（局長）岡村 安彦（主査）

お問い合わせ
山口県立大学企画デザイン研究室 / 農業スタイルコレクション 2013 実行委員会
住所：〒753-8502　山口市桜畠 3-2-1　　TEL & FAX：083-928-2550
E-Mail：myumiko@yamaguchi-pu.ac.jp　　担当：水谷由美子